

助教・助手展 2022

武蔵野美術大学助教・助手研究発表

Exhibition 2022 Research Associates and Research Assistants



ご挨拶

武蔵野美術大学の助教・助手は、研究室運営を担い学生の制作研究や学生生活に寄与する一方で、自身も一人の作家、デザイナー、研究者として活躍しています。本展は、彼らの創作活動や研究成果を学内外に広く紹介する場として、美術やデザインなど幅広い領域に渡る63名の若く瑞々しい感性に溢れた作品を一堂にご覧いただくものです。本学の助教・助手であることのみを出品条件とする本展では、枠にとらわれない挑戦的な作品が集います。さらに出品作家自身が企画運営に携わることで、毎年特色ある展示を作り上げている点も、本展の特徴の一つといえるでしょう。1976年から2019年まで開催してきた「助手展」は、2020年からスタートした助教制度により「助教・助手展」と名を変えました。第2回目となる本展ですが、これまでの精神を受け継ぎ、出品者による自主運営という点を展覧会における要として、助教・助手の有志が主体となり企画運営を進めています。同時代に生きる表現者達による多彩な作品の数々と、彼らが柔軟な発想で作りあげた展覧会企画によって、驚きと熱い冒険心に出会えるまたとない機会となることでしょう。

2022年12月吉日
武蔵野美術大学 美術館・図書館
館長 赤塚祐二

開催にあたって

「助教・助手展」としては2年目となる今年度も、こうして無事に開催されることを心から嬉しく思います。ジャンルもテーマも設けていない本展において、本学の助教・助手であることは出品者全員を繋ぐ唯一の共通点です。今年度は、これまでで最も多い63名の助教・助手が展示に参加することとなりました。制度変更に伴ってスタッフの総数が増えたことにより、本展の参加人数も増加傾向にあり、今年度の企画を開始した当初は、これまで以上に多岐にわたる研究領域の作品が一堂に会する、ともすればただ作品を寄せ集めたまとまりのない展示になりかねないボリュームと、少しの不安を感じました。しかし同時に、この状況がお互いの作品にどう作用するのか、それを観た人がどのような感想を抱くのか、今までの展示とは違ったものになる期待もありました。それぞれの分野の中に閉じこもってはいけなく、気付きにくい発見が、出品者と鑑賞者の双方にあることを願っています。ご来場いただいた皆様には作品やイベントを通して、日頃研究室スタッフとして働きながら、表現者や研究者としても試行錯誤を繰り返す助教・助手たちの熱量を少しでも感じていただけたら幸いです。そして、多くのご意見、考察、批評等をお待ちしております。最後になりますが、本展を開催するにあたりご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

2022年12月吉日
助教・助手展 2022 運営委員会
代表 寺元詩織(工芸工業デザイン学科研究室)

助教・助手展 2022

武蔵野美術大学助教・助手研究発表

02 ごあいさつ 開催にあたって

04 目次

12 アトリウム1

キンマキ
風間南楓
根本佳奈子
寺元詩織
宮城島万莉子
細井えみか
大山真莉香
田村啓悟
佐藤 佑
大野陽生
大嶋洋二郎

23 アトリウム2

宮本万智
志田真菜実
柴田有紀
林深音
難波梨乃
前野東子
塩見瑠璃子
木村桃子
夏目菜々子
矢萩理久

33 展示室2

松河直美
川名晴郎
山本亜由夢
宮入 惇
佐藤美樹
山田百香
秋葉麻由子
多比良歩南
佐々木玲美
旗智柚奈
郡 祐太郎
齊藤啓輔

45 展示室4

たかはしけいこ
キバツバキ
みやでああやみ
荻野楓子
所 彰宏
山本麻璃絵
新井 湧
平川いつか
松塚実佳
迫 竜樹
竹下早紀
バクビョンイク

57 美術館ホール

増山 透
多持大輔

59 展示室5

浅沼恵美
伊藤安鐘
大井直人
岡野紗咲
若林穂乃香

64 第10講義室・ホワイエ

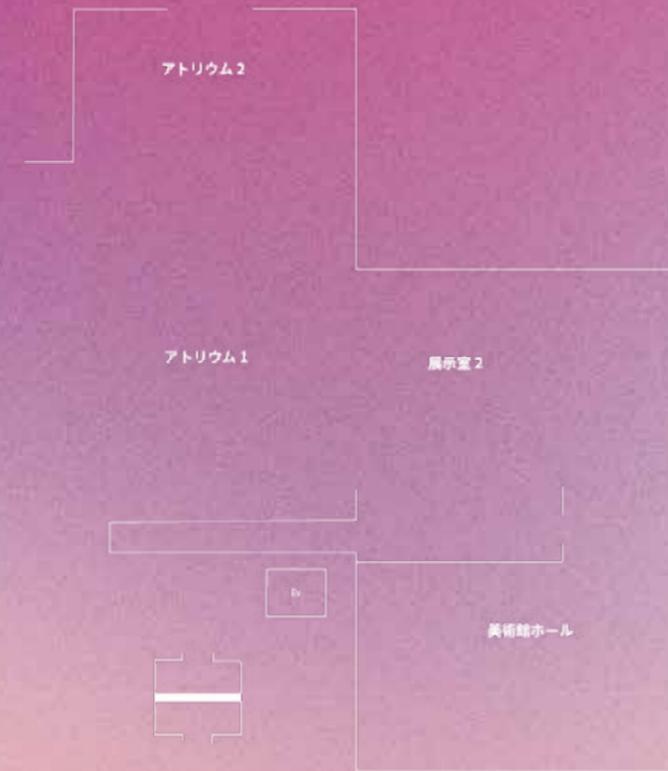
白井伶奈
田中佑季
白鳥佐和
棚橋 玄
大関龍一
関根 亮
湯浅美丹
小野田 藍
小山さくら
宇都宮麻香
三ツ井 岳

78 関連企画

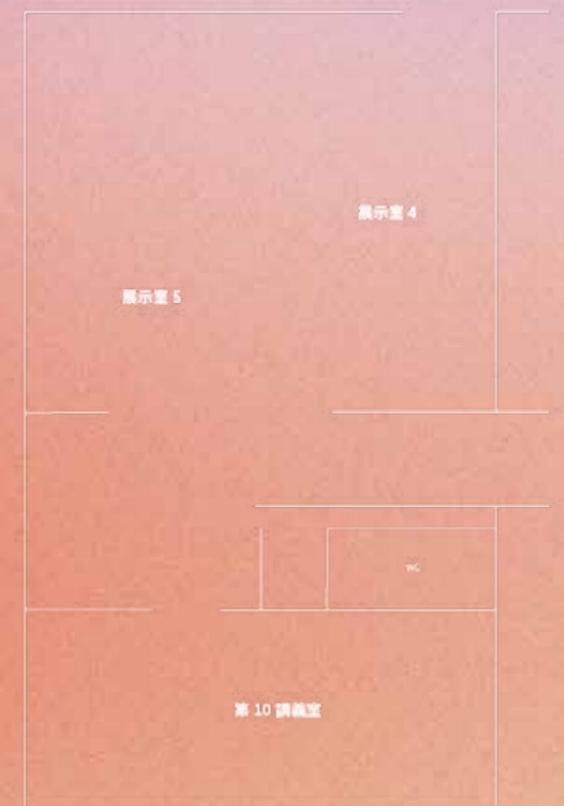
80 Visual story

Exhibition works

1F



2F



【凡例】

各作品情報は、以下の順に記した。

- 作家名
- 所属研究室
- 作品名
- 技法・素材
- サイズ
- 制作年

技法、素材の順に記した。複数ある場合は「、」で区切り記した。

作品サイズは「H(高さ)×W(幅)×D(奥行き)」の順で記した。

映像作品は上映時間「〇分〇秒」で記した。

サイズ可変の場合は「サイズ可変」で記した。

同じサイズのもの複数ある場合は(〇点)で記した。

制作年に関して記載のないものは全て2022年である。

アトリウム 1



キンマキ



風間南楓



根本佳奈子



寺元詩織



宮城島万莉子



細井えみか



大山真莉香



田村啓悟



佐藤 佑



大野陽生

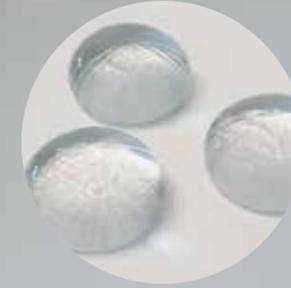


大嶋洋二郎

アトリウム 2



宮本万智



志田真菜実



柴田有紀



林深音



難波梨乃



前野東子



塩見瑠璃子



木村桃子



夏目菜々子



矢萩理久

作品の写真をクリックすると、個人ページに飛びます。

展示室 2



松河直美



川名晴郎



山本亜由夢



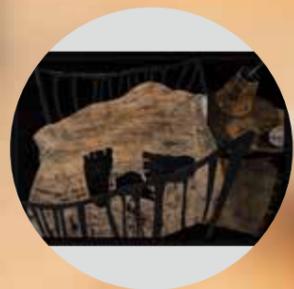
宮入 惇



佐藤美樹



山田百香



秋葉麻由子



多比良歩南



佐々木玲美



旗智柚奈



郡 祐太郎



齊藤啓輔

展示室 4



たかはしけいこ



キバツバキ



みやでああやみ



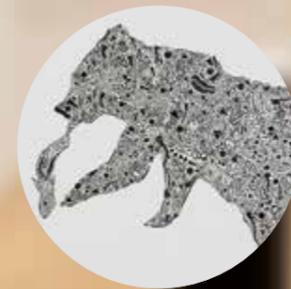
荻野楓子



所 彰宏



山本麻璃絵



新井 湧



平川いつか



松塚実佳



迫 竜樹



竹下早紀



パクビョンイク

作品の写真をクリックすると、個人ページに飛びます。

美術館ホール



増山 透



多持大輔

展示室 5



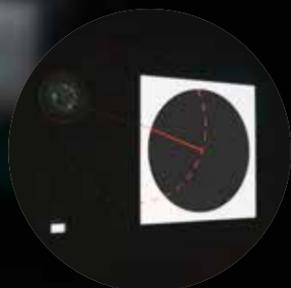
浅沼恵美



伊藤安鐘



大井直人



岡野紗咲



若林穂乃香

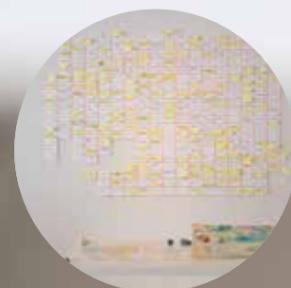
第10講義室・ホワイエ



白井伶奈



田中佑季



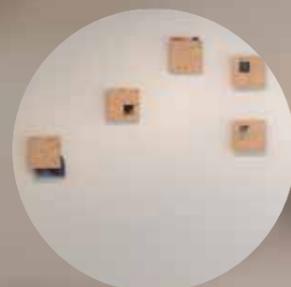
白鳥佐和



棚橋 玄



大関龍一



関根 亮



湯浅美丹



小野田 藍



小山さくら



宇都宮麻香



三ツ井 岳

作品の写真をクリックすると、個人ページに飛びます。

キンマキ

KIMMaki

油絵学科油絵研究室

riverside husen

油彩、キャンバス
91 x 116.7 cm

hand anime

ミクストメディア
ループ

私は自分が描いた絵があることによって起こる絵の周りの状況を作品にしたいと思っています。

"riverside husen" 川下りをしながら作品を鑑賞するという展覧会「芸術激流」に出品した作品です。実際に山にも大きい付箋を貼りました。

"hand anime" しりとりがループしている動きと手の動きを合わせています。



風間南楓

Kazama Mifu

空間演出デザイン学科研究室

MG-04 Little V

アクリル板、ソフトメイプル
101.5 x 37.5 x 6 cm

MG-05 Twenty-four B

アクリル板、アルダー
120 x 33 x 5.5 cm

Girls, Be Ambitious!



◀ 作者ポートフォリオサイトはこちら

根本佳奈子

NEMOTO Kanako

空間演出デザイン学科研究室

わたしはここで生きている

柿渋、鉄、半紙、モーター

180 x 60 x 60 cm

2021

身動きを取らず、まるで死んでいるように見える蛹は、その身体の内側で凄まじい変化を遂げている。蛹の背部を呼吸しているように動かすことで、蛹の「生」を可視化した。



寺元詩織

TERAMOTO Shiori

工芸工業デザイン学科研究室

shut up(in a pot)

手びねり、磁土

50 x 40 x 40 cm ほか数点

自然を小さな鉢の中に切り取って自分の好きなように育てる行為は、思い通りにしたいのか、自然のままがいいのか。手の跡が強く残ったり、ひび割れたりゆがんで自然にできる土の表情は好きだけど、具象的なとっかかりを用意して手を加えないと作品にできない自分もまた、どうしたいんだろう。



◀ 作者ポートフォリオサイトはこちら

宮城島万莉子

MIYAGISHIMA Mariko

共通彫塑研究室

金魚

大理石
30 x 68 x 80 cm

うさぎ

砂岩
28 x 22 x 38 cm

海獣の子

御影石
34 x 75 x 45 cm

自然や生き物の動きを抽出し、石彫で表現することを試んでいます。動きには歩く、走る、飛ぶなど様々あり、彫刻においては躍動感ある形で表現されることが多いですが、自然に寄り添うことで見えてくる、生命が存在するためのかすかな動きに惹かれます。目を凝らさなければ消えてしまうような動きから、生命そのものの強さ、生き物それぞれが持つ時間も表現できたらと思います。



◀ 作者ポートフォリオサイトはこちら

細井えみか

HOSOI Emika

共通彫塑研究室

Wall

ウレタン、金物、鉄、ボルトナット、木材
210 x 295 x 57 cm

Chabudai

ウレタン、クランプ、木材、布
15 x 100 x 70 cm

Untitled space

ウレタン、ボルトナット、木材
62 x 46 x 46 cm

Act of connecting - Mirror

ウレタン、金物、鉄、布、ボルトナット
160 x 81 x 70 cm

近年は「既知とそうでないもの」を主なテーマに、鉄と異素材を組み合わせた彫刻や立体作品を制作する。日常風景や生活空間から抜粋した要素を再構成し、鑑賞者が自身の記憶を辿る体験を通して、人がどのように「既知」から自らの「安心」や「拠り所」を作り出すのかを探求する。



◀ 作者ポートフォリオサイトはこちら

大山真莉香
OYAMA Marika
共通絵画研究室

イカ
ミクストメディア、番線、布
60 x 60 x 200 cm

イカは宇宙人かもしれない。頭の上に内臓がある特殊な進化の仕方。神秘的なフォルム。暗闇で怪しく発行する光。イカという美しい生きものに魅せられてから、私の毎日には常にイカがいる。食べることは簡単だが、理解することは難しい。魚屋の店先で会える身近な存在なのに、その謎は深海、やがて宇宙まで続いていく。 つくることで、少しでもイカに近づいていきたい。えら呼吸のできない哺乳類の私は、憧れるように深海を見つめる。



田村啓悟
TAMURA Keigo
工芸工業デザイン学科研究室

relationship-2
ガラス、鉄
80 x 10 x 10 cm ほか数点

飼育された亀は水槽という限られた幾何形態の中で生きている。人もまた同じである。隣の水槽に感化され、今の水槽から脱却を意識する。



佐藤 佑

SATO Yu

工芸工業デザイン学科研究室

EDGE

レッドオーク、山桜
72 x 240 x 90 cm

ウッドショックにより木材価格が高騰している昨今。いかに安価な材料で付加価値をつけるかに焦点を置いた。耳付きの材料は一般的にテーブルトップで使用されるが、顧客の要望や歩留まりの関係で不要箇所としてカットされる場合がある。そんな行き場を無くした耳材を要所で使用し、有機的なラインを残しつつテーブルとして仕上げた。



大野陽生

OHNO Haruki

情報教育センター

やや暴れたお湯

FRP、ウレタン樹脂、ポリエステルパテ、
ラッカーパテ、ラッカー塗料
110 x 32 x 32 cm

纏まった太いお湯

FRP、ウレタン樹脂、ポリエステルパテ、
ラッカーパテ、ラッカー塗料
32 x 90 x 90 cm



◀ 作者ポートフォリオサイトはこちら

大嶋洋二郎

OSHIMA Yojiro

工芸工業デザイン学科研究室

Phenomenon Eternity

ウォールナット、ガラス、牛革、大理石
テーブル 72 x 90 x 90 cm (1点)
椅子 77 x 57 x 51 cm (2点)
2020

美しさや心地よさは長く続いてほしい。そんな願い“永遠”を表した。円卓に集まった人は中央に向かって顔を突き合わせ、意思や体験を共有し心を豊かにしていく。内を向くの心は大きく外へ広がっていく。そんな様を形（テーブル）に収めた。



宮本万智

MIYAMOTO Machi

通信教育課程研究室

a specimen

ワイヤー、毛糸、布、絹
86 x 40 x 19 cm

人間の根源的なかたちとして女性のドレスをもとに立体・インスタレーションを展開しています。

今作はドレスの一部、端切れやガラクタが植物が鉱物が動物が見分けがつかないまま、増えたそばから朽ちていく標本のようなものがテーマになっています。



◀ 作者ポートフォリオサイトはこちら

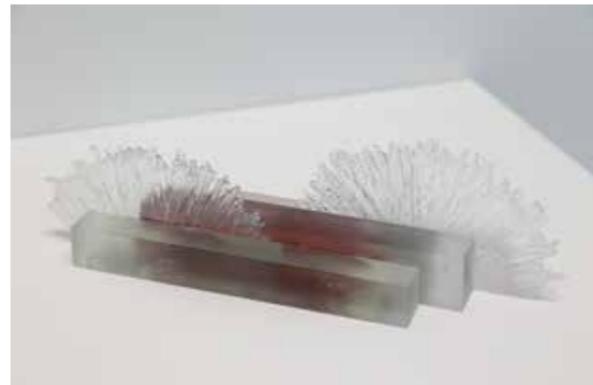
志田真菜実
SHIDA Manami

工芸工業デザイン学科研究室

漾漾としたものたち

ガラス
サイズ可変

しとしと、じわへ、ゆらり。
湿度を感じる空気感に惹かれます。



柴田有紀
SHIBATA Yuki

工芸工業デザイン学科研究室

しみとおってゆく

キルンワーク、ホットワーク・(素材) ソーダ
ガラス
皿 1 × 12 × 12 cm
ボトル 26 × 7 × 7 cm ほか数点

カーテンに漏れる若い日差し。起きぬけのふとん。 ほんたうのレシート。洗い立てのおさら。 既視感を織り交ぜながら燃らされた記憶は、それぞれの日を辿りなぞってゆく。



林深音

HAYASHI Mio

空間演出デザイン学科研究室

1ness

石膏

200 × 200 × 200 cm

もの - 空間

建築 - 道路

陸 - 海

星 - ダークマター

記憶 - 時間

人間 - 言葉

タイルが抜け落ち顕在化された目地の姿は、全てに接続する感覚を呼び起こす。



難波梨乃

NAMBA Rino

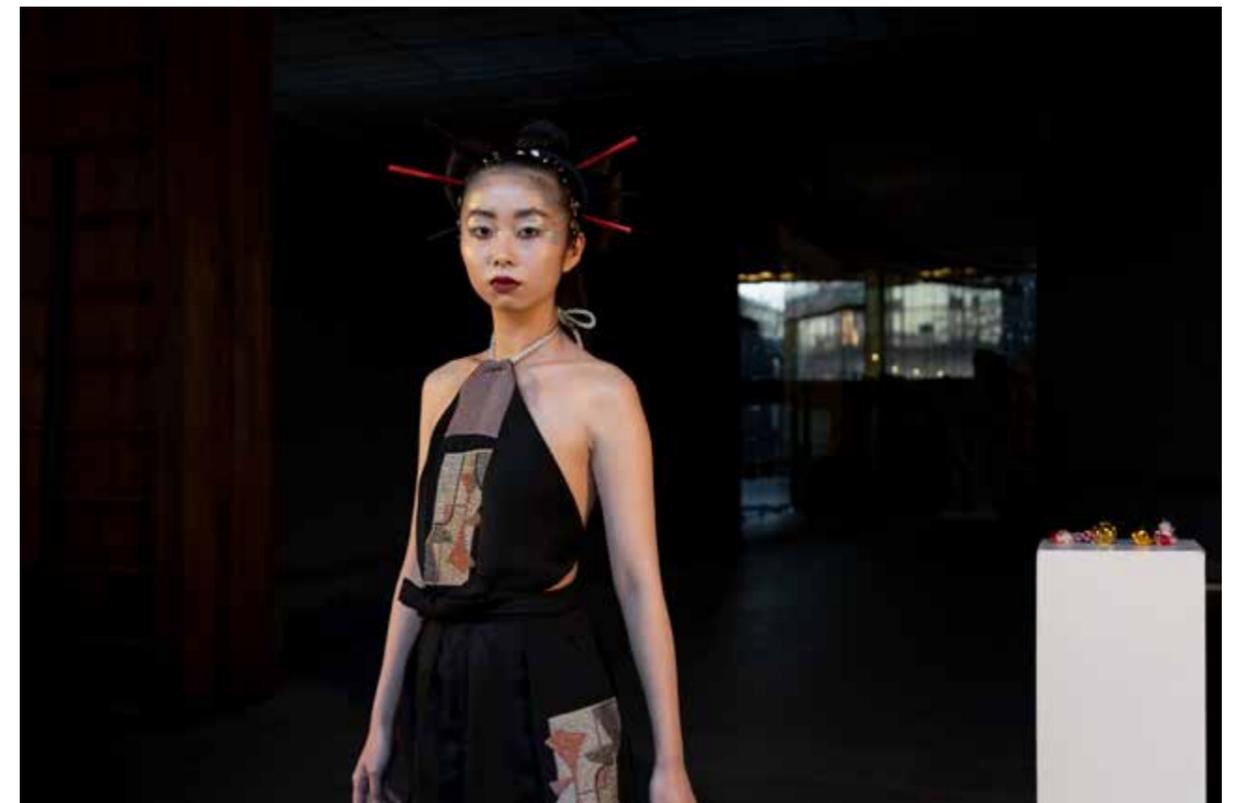
空間演出デザイン学科研究室

ぼんぼり

布、反物

ショー 10 分間

錦鯉の交配から着想を得た「継承・創出・変容」について、日本文化による通過儀礼をテーマとしたパフォーマンス作品。我々人間は、通過儀礼を設けることで、種の交配とその成長過程で得た変化に意味を付与する。通過儀礼があることで、自らの変化を受け入れなくてはならない。たとえぼんやりとしていてはつきりしなくとも、そして後世に変化を与えていく。



前野東子

MAENO Toko

工芸工業デザイン学科研究室

polygon it

多重織、麻、綿
サイズ可変 (2点)

経と緯が規則的に織り合い、繋がりあうことでできた立体の中に浮かぶそれ。



塩見瑠璃子

SHIOMI Ruriko

デザイン情報学科研究室

おるか

カットティングシート
250 × 210 cm

シャツは冬服を着ませんが、イラストレーションの中においては自由です。
実物大に出力することによって、虚構を現実近づけたときのギャップを楽しむ実験。



◀ 作者ポートフォリオサイトはこちら

木村桃子

KIMURA Momoko

芸術文化科学研究室

マイホール

水性インク、木 / サイズ可変

プランチドロイング

水性インク、木 / 67 × 133 × 20 cm

Sculptor

木、光ファイバー / 20 × 50 × 45 cm

Caelum

アクリル棒、柿渋、木、米 / 10 × 20 × 15 cm

Sculptor II

インク、紙、木、モルタル / 16 × 36 × 5 cm

筒状に流れる光の奥行きを光の届く時間だとすると、星座の持つ立体的な光の厚みは時間の厚みとして見える。

彫刻室座は、南半球の星座で、命名当初ラテン語で「Atelier du Sculpteur」だったが、現在は短縮化され英語名 Sculptor(彫刻家)を正式に固有名としている。しかし、日本語ではラテン語を直訳した「彫刻室座」、つまり彫刻の生まれる空間という意味の名前が使われている。



◀ 作者ポートフォリオサイトはこちら

夏目菜々子

NATSUME Nanako

工芸工業デザイン学科研究室

suya suya

編み、ウール
120 × 120 cm (3点)

ぎゅっとつみ込んでくれる布です。
あたたかい紅茶とおやつを準備して、布にくるまって、
おだやかさを忘れずにたいです。



◀ 作者ポートフォリオサイトはこちら

矢萩理久

YAHAGI Riku

芸術文化学科研究室

実体験と生痕化石

インスタレーション

痕跡のマケット no.1

セラミック

痕跡のマケット no.2

セラミック

痕跡のマケット no.3

セラミック

痕跡のマケット no.4

セラミック

燃えるおぼけ、フランジャー

セラミック、木材

flame と frame

セラミック、木材

すべてサイズ可変 (7点)

痕跡について考えている。痕跡は最も身近なプリミティブな表現である。様々な要因の蓄積により生まれた痕跡は、意を持ち始めシグナルを発生させる。そのシグナルを炎の痕跡である焼物に再編集した時に現れる、意のズレとその近似値を探る。



松河直美

MATSUKAWA Naomi

油絵学科油絵研究室

ネッシーのいないお風呂場

油絵具、キャンバス、パステル

227.3 × 181.8 cm

ネス湖に住むネッシーが、屈斜路湖に住むクッシーに会いに行くという話を思いついた時に描いた絵です。



川名晴郎

KAWANA Haruo

日本画学科研究室

ゆく春

岩絵具、印刷物を転写、雲肌麻紙、水干絵具、
典具粘紙、箔、ラッカー
72.7 × 91 cm (6点) / 65.2 × 91 cm (2点)
/ 30 × 30 cm / 25.5 × 36.5 cm



山本亜由夢

YAMAMOTO Ayumu

油絵学科油絵研究室

幽霊城

油絵具、アクリル絵具、キャンバス
227.3 × 181.8 × 3 cm

「親密と不和」をテーマに楽園や恋人たちのような鮮やかだったり暖かなモチーフや空間のなかにに潜む不穏さや、危うさも描いています。反したものがどちら存在しているということが、絵の空間をより多層的にし、存在が強固になると感じているからです。



宮入 惇

MIYAIRI Jun

通信教育課程研究室

don't forget your ghost

雲肌麻紙、岩絵具、胡粉、墨無機顔料
182 × 273 × 3 cm

現実には存在しない風景、欠損した人体や動物のフォルムを制作することで、自身の死生観や、過去の記憶から生まれる感覚的なものを大切に表現したいと思っています。



佐藤美樹

SATO Miki

通信教育課程研究室

34°Cの水

インクジェットプリント、印画紙
29.7 × 42 cm (8点)

体温に近く、温度を感じにくいもの。名前がなく、曖昧で、所在もないものは、だれかがうまれたり、しんだり、いきていることはあまり関係なく、大きな流れの中にある。ただ無理なく孤独にあったり、居心地良く、今もこれから停滞し続けている。



山田百香

YAMADA Momoka

芸術文化学科研究室

真柏II

油絵具、キャンバス

162 × 400 × 3 cm

“盆栽”の美。それは自然の力に人の創造的行為が加わることによって生み出されている。
私はF100号3枚の中に盆栽を描いたが、それは根から幹にかけての一部に留まっており全貌は見えない。
この作品の盆栽は、鑑賞者が自らの美的感覚で描かれていない盆栽の上下左右を創造することにより、完成される。しかしそれは創造によって無限に成長し続け、盆栽と同じく永久に完結しないのである。絵画による盆栽の表現の新たな挑戦であった。



秋葉麻由子

AKIBA Mayuko

日本画学科研究室

秘密基地

岩絵具、雲肌麻紙、砂、膠

200 × 300 × 5 cm

私は今、日常の景色をテーマに制作をしています。
いつもそこにある生活の中から自分の心が動いた現場をそのまま切り抜いて絵にしています。
絵を描くとき、私はなるべくシンプルな表現をしたいと思っています。そこにはモチーフとなる対象の存在を見る人へダイレクトに感じてもらいたい為です。
対象となるモチーフの大切な要素を丁寧に一つ一つ掬い取っていくと、新しい造形が目の前に現れます。それを表現とする喜びを基盤に絵を描いています。



◀ 作者ポートフォリオサイトはこちら

多比良歩南

TAIRA Honami

視覚伝達デザイン学科研究室

逆上がりの記述

映像、鉄、粘土
サイズ可変

この展示のターゲットは、日々進化（暴走）していく文明と古来からほとんど変わらない身体の内発的なリズムの矛盾に挟まれた大人たち。誰もが子供の頃に一度は経験した「逆上がり」をモチーフにし、大人たちの知覚をほんの少し揺らがすことを目的とした作品を展示する。



佐々木玲美

SASAKI Remi

工芸工業デザイン学科研究室

注器

轆轤成形 磁土
10 × 15 × 10 cm / 12 × 13 × 8.5 cm /
6 × φ 7 cm ほか

寒さも感じつつどこか微睡む冬の季節。白く、淡く、丸みをおびた注器を制作しました。



旗智 柚奈

HATACHI Yuna

工芸工業デザイン学科研究室

Re-filament

アクリル、PLA 樹脂

8 × φ 26 cm / 5 × φ 15 cm (2点) /
3 × φ 10 cm

3D プリンターで出力する時に出るフィラメントゴミ、サポート、失敗した出力物など、捨てるのが当たり前のフィラメントゴミ達を新しく何かに制作できないかという考えから始まった作品です。



郡 祐太郎

KORI Yutaro

クリエイティブイノベーション学科
研究室

Re : Bio Plastic Couture

藻類、布

サイズ可変

藻から作ったバイオプラスチックを使って服を制作した。



齊藤啓輔

SAITO Keisuke

建築学科研究室

私の建築表現

図面、模型、写真

210 × 297 cm / 297 × 420 cm ほか数点

2010 - 2022

作者が担当した建築や設計中のプロジェクトの展示。図面と模型から建築を構想する。



◀ 作者ポートフォリオサイトはこちら

たかはしけいこ

TAKAHASHI Keiko

視覚伝達デザイン学科研究室

自由飛行

シルクスクリーン

サイズ可変

夜空に浮かぶ星たちは、それぞれが独立した小さな点である。あの星とこの星を、線で繋いでみる、あるいは、囲んでみる。すると、独立していた小さな点たちは、互いに響きあい、見えてこなかった景色が夜空に浮かび上がる。新しい宇宙の物語が、動き始める。この実験は、ブルーノ・ムナリーのデザイン教本『空想旅行』阿部雅世訳（2018）の問いかけに対するアプローチである。



◀ 作者ポートフォリオサイトはこちら

キバツバキ

KIBATSUBAKI

通信教育課程研究室

V 明るく・くっきり ()

ミクストメディア、麻布、鉄、フェルト、
油性インク

90 × 90 × 5 cm (2点) /

60 × 60 × 5 cm (4点)

身の回りでの外的要因を表現する方法、技法を模索する。今回は、意図的、偶発的に記憶しているイメージを切り取りパッチワークにしたものを制作。自宅から研究室のある吉祥寺までの外的要因を展示しています。



みやであやみ

MIYADERA Ayami

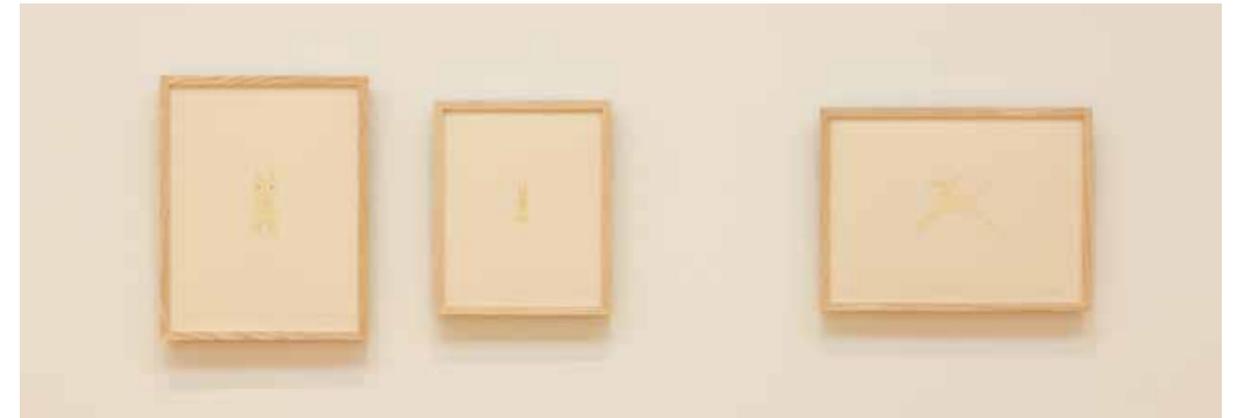
油絵学科版画研究室

atsumeta vol.2

リトグラフ

サイズ可変

立体である郷土玩具を平面作品にすることでアルバムに綴じてコレクションしているような感覚で制作した。



萩野楓子
OGINO Fuko
基礎デザイン学科研究室

at
experiments away from the sea
印画紙、本
75 x 80 cm (2点)



所 彰宏
TOKORO Akihiro
油絵学科版画研究室

疾走
共鳴
赤い壁
モノタイプ
67.3 x 88.4 cm (3点)

記録写真をもとに描いた絵を版表現を用いて画面に定着し、「今」の感覚で再構成することで、時間感覚や記憶の不確か性を含んだイメージの創出を試みている。



山本麻璃絵

YAMAMOTO Marie

クリエイティブ
イノベーション学科研究室

石斧をモチーフにした石斧の彫刻

樟、黒御影石、白御影石、大理石
サイズ可変
[共同制作者・姫野亜也]

石斧には国境がなく言語もない。美術という単語どころか言語すらない頃も、石を割り出し木を彫る時、石と木が組み上がった時、つくる行為の高揚感や闘争心、情動や快味を感じていたのではなかろうか。現代で彫刻をつくる私達は多様な価値観が存在する現代人よりも、大昔の石斧を作っていた人の方が話を通じるかもしれない。（現時点ここではめっちゃくちゃ言語を使っているが）彫刻の制作がどこまで言語を越えられるかを試みる。



新井 湧

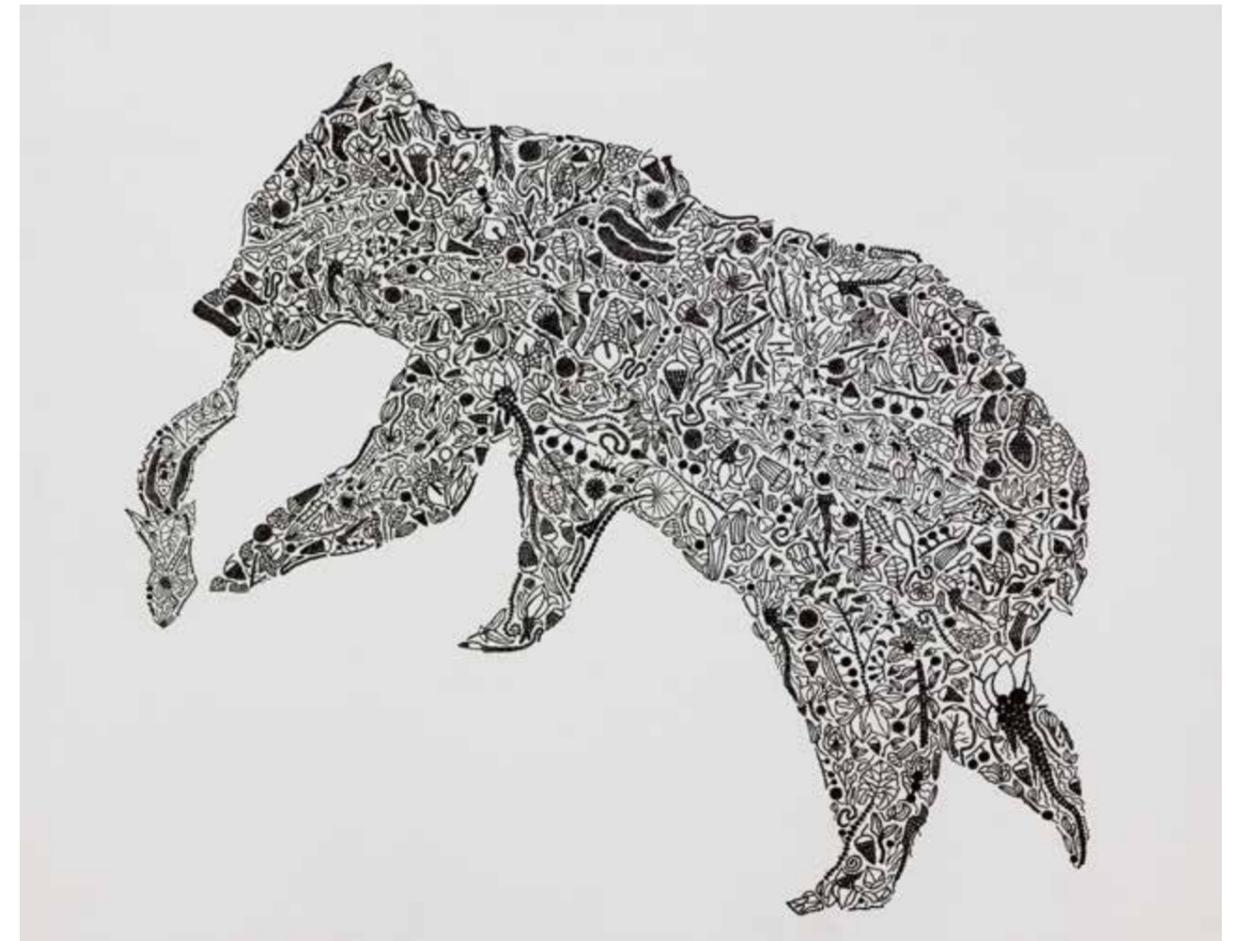
ARAI Yu

通信教育課程研究室

Atlas of brown bear

ジェッソ、油性マーカー
72.7 x 91 x 3 cm

北海道の大地で多様な生き物を観察し、書籍や博物館で得た知見を基に頂点捕食者であるヒグマへと至る食物連鎖を表現しました。ミクロはマクロを構成し、マクロはミクロを内包する一たつ一つの細胞から始まり、やがて巨大なヒグマへと至るまでに現れる集合体の不思議なビジュアルと多様な生き物が織り成す食物連鎖の面白さを感じていただければと思います。



平川いつか

HIRAKAWA Itsuka

通信教育課程研究室

Nothing really blue

28 x 21.5 cm

野良猫との距離感

37 x 28 cm

からす天国

38 x 45.5 x 1.7 cm

わずれもの

20 x 20 x 2 cm

すべてシルクスクリーン

2020 - 2022

日記をもとに作品をつくる、という過程がいつの間にか出来上がっていた。日常というのは大抵かなしいことで出来ていると思う。うれしいこともそれなりにあるのだけれど、こちらの方が割合が少ない気がする。



松塚実佳

MATSUZUKA Mika

通信教育課程研究室

touch#1

touch#2

touch#3

touch#4

touch#5

touch#6

水彩絵具、キャンバス、スクリーンプリント
35.6 x 43.2 x 2 cm (6点)

目にしたものの感じたこと、個々の認識とその組語。



迫 竜樹
SAKO Tatsuki
共通絵画研究室

Fix(ごめん)
ミクストメディア
100 x 200 x 20 cm



◀ 作者ポートフォリオサイトはこちら

竹下早紀
TAKESHITA Saki
工芸工業デザイン学科研究室

Eeyo
パルサ材
-

パルサ材を染色・乾燥させた後、熱加工によって色を変化させる。人為的に操作できない色の変容は、自然物特有の姿を残す。緑色がピンク色に、青色が赤色に、不思議な色の変化を遂げる。



◀ 作者ポートフォリオサイトはこちら

パクビョンイク

PARK Byungik

工芸工業デザイン学科研究室

차곡차곡 (Chagok_Chagok)

ソルダリング、銅
サイズ可変

“차곡차곡”は、何かをきちんきちんと積み上げる様子を表す言葉。規則的だったり、不規則的だったり、“차곡차곡”積み上がって、現れる造形の可能性を探求。



増山 透

MASUYAMA Toru

映像学科研究室

ParkingArea

実写映像、3DCG
6分

実写映像と3DCGを用いて、6分ほどの映像作品を制作しました。この作品をご覧いただいている間は、少しでも現実世界の喧騒を忘れて、映像の世界へ浸っていただけると幸いです。



◀ 作者ポートフォリオサイトはこちら

多持大輔

TAMOCHI Daisuke

映像学科研究室

青なじむ部屋

実写映画、HD、カラー
20分

社会人の青柳由水(25)は、配達された荷物を未開封のまま玄関に溜め込んでいる。ある日、家に帰ると見ず知らずのおじさん・橙山こやし(60)が荷物を開け、勝手にみかんを食べてくつろいでいた。



浅沼恵美

ASANUMA Megumi

芸術文化学科研究室

かはたれどき

アニメーション、合成樹脂、銅線 ほか
6分32秒
130 x 20 x 20 cm

「自然物と人工物」「立体と平面」「アナログとデジタル」対照的存在の掛け合わせによる実験。透過率の高い素材を用いた投影媒体(ディスプレイアート)へアニメーションを投影、呼吸と光合成を表現。



◀ 作者ポートフォリオサイトはこちら

伊藤安鐘

ITO Akane

映像学科研究室

Rapid Eye Movement

インクジェットプリント、映像
200 × 300 cm

目を閉じて頭の後ろっ側の景色を見て。後頭葉の眼が開くのを感じて。



大井直人

Oi Naoto

デザイン情報学科研究室

Generation

アクリル板、アルミフレーム、電子部品、
デバイス、UV レジン
180 × 36 × 36 cm

鍾乳洞内に見られる「石筍」とその成長過程を参考に、紫外線を浴びると硬化する樹脂を滴下して自動的に立体物を生成する装置を制作、さらに人の動き (= 鑑賞されていること) を感知したときにのみ動作するようなシステムを組み込んだ。本来は暗闇の中で人知れず起こっているであろう現象を観測の下でのみ再現する仕組みをつくり、世界が構築されていく様相をあらわにすることを試みた。



◀ 作者ポートフォリオサイトはこちら

岡野紗咲

OKANO Saemi

映像学科研究室

中心の求め方

映像、プロジェクター、MDF
200 x 300 x 100 cm

知っていることに安心を覚えてはならない
正しいからと思考を委ねてはならない
自分の解き方を諦めてはならない

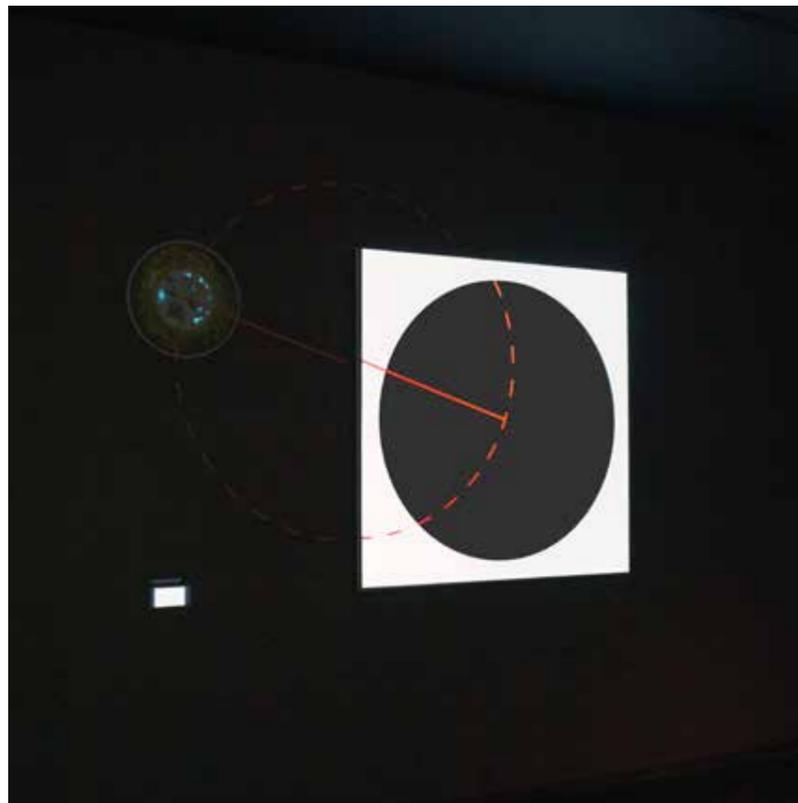
若林穂乃香

WAKABAYASHI Honoka

映像学科研究室

LAUNDRY

アクリル板、液晶ディスプレイ、MDF ほか
180 x 120 x 75 cm



◀ 作者ポートフォリオサイトはこちら

白井伶奈

SHIRAI Rena

デザイン情報学科研究室

@ ゆうきちゃん

写真

100 × 100 × 100 cm

ゆうきちゃんへ

あの頃のあなたは、透きとおっていて、霞のようで、決してその手を掴ませてはくれなかったよね。でも、今はいつも隣に、たしかに、あなたが存在している。呼吸を感じる。身近な存在となって、生々しい人間として、ここにいる。この関係性は、きっと永遠には続かない。しらいちゅより



田中佑季

TANAKA Yuuki

デザイン情報学科研究室

@ しらいちゅ

写真

160 × 100 × 70 cm

しらいちゅへ

ぼかぼかとあたたかい、ひだまりのようで、陽の光が沈むように夜にはいなくなっていたあなた。今は明るくあたたかい世界に私とあなた、ふたりだけ。あなたがいるから私がついて、私がいるからあなたがいる。終わるときも一緒だよ。 ゆうきちゃんより



白鳥佐和
SHIRATORI Sawa
視覚伝達デザイン学科研究室

「あそび」を構成する環境の分析—
—幼児期から思春期における、遊び
に係わるエピソード記憶の記述の分
析
サイズ可変

1980年代～2000年代に相当する、幼児期から思春期における遊びに係わるエピソード記憶の記述を分析、分解し、「あそび」が成立する環境条件を紐解いていくことが本調査のねらいである。分析の対象となるのは視覚伝達デザイン学科3年次の授業課題として約30年ほど継続して実践されている「遊びの地図」。遊びが「あそび」として成立する環境を知ることで「あそび」そのものの実態に迫る、段階的な調査の一つである。



棚橋 玄
TANAHASHI Gen
建築学科研究室

筑紫野の納骨堂
図面、模型
20 × 40 × 60 cm / 40 × 90 × 60 cm / 40 ×
40 × 40 cm



◀ 作者ポートフォリオサイトはこちら

大関龍一

OZEKI Ryuichi

建築学科研究室

国分寺南町の家

図面、模型

20 × 45 × 45 cm

国分寺の料理人のために設計した「かざぐるま」のような住宅の設計。
敷地は多摩丘陵や富士山が見える、国分寺崖線上の住宅街にある。



関根 亮

SEKINE Ryo

クリエイティブイノベーション学科
研究室

Random access memory.

合板、布

サイズ可変

眼前に拡がる光景を映像として捉え、媒体による印象の変換を試みるために手法と支持体を検討。
異なる素材を組み合わせ、壁面に提示することで、映像の特性を再考します。



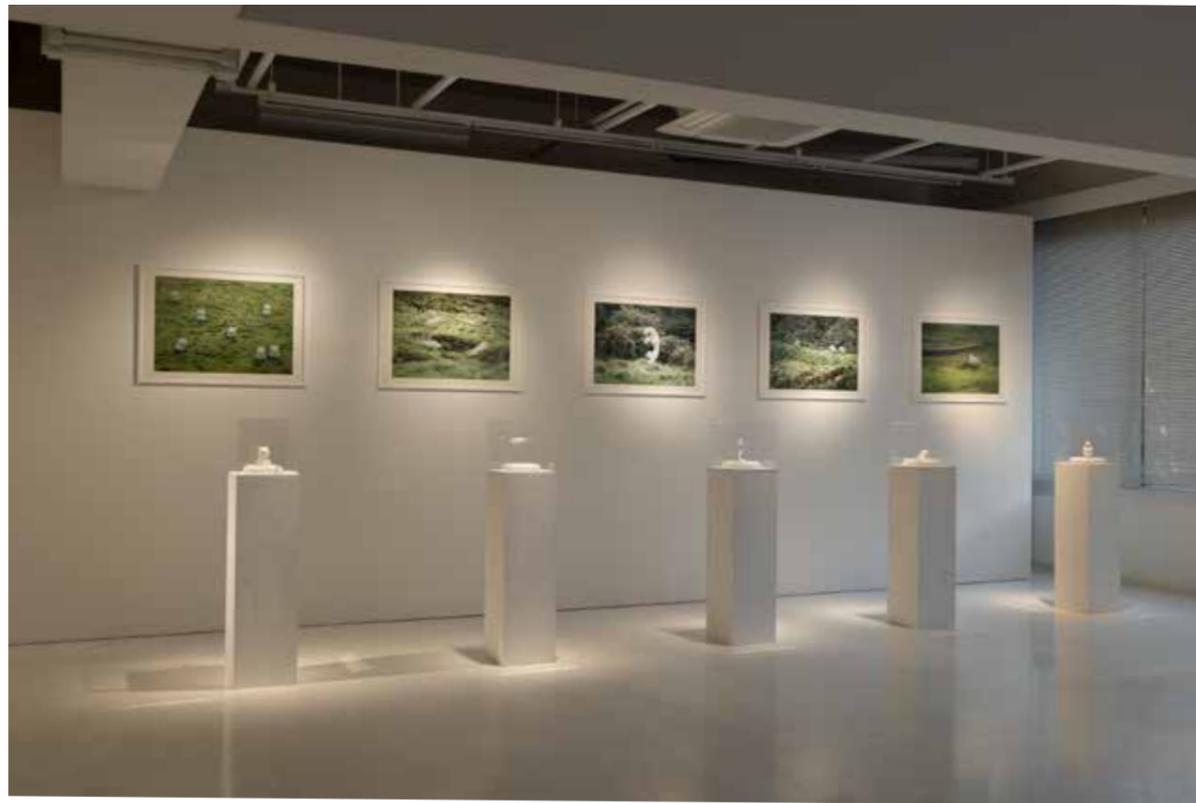
湯浅美丹
YUASA Mini

映像学科研究室

qyusio planitia

3DCG、インクジェットプリント、レジンほか
51.5 × 72.8 cm (5点) / 12 × 4 × 8 cm / 10 ×
3 × 12 cm / 10 × 7 × 7 cm / 5 × 6 × 8 cm / 4.5
× 4.5 × 12 cm

子供の頃に会ったような気がする生き物たち。私は疲れたとき彼らに
会いに行く。私は彼らと旅をしたり遊んだり眺めたりしていたい。



小野田 藍
ONODA Ai

芸術文化学科研究室

チラン

コピー用紙、水性顔料ペン、油性染料ペン
サイズ可変
2018

無題

模造紙、水性顔料ペン
109.1 × 157.6 cm

「チラン」は2018年から制作している作品です。この作品は最近まで「ま
るとしかく」というタイトルでした。



小山さくら

KOYAMA Sakura

クリエイティブイノベーション学科
研究室

へいへいぼんぼん

イラストレーション、鉛筆、色鉛筆、水彩絵具、
紙
14.8 × 10 cm ほか数点



宇都宮麻香

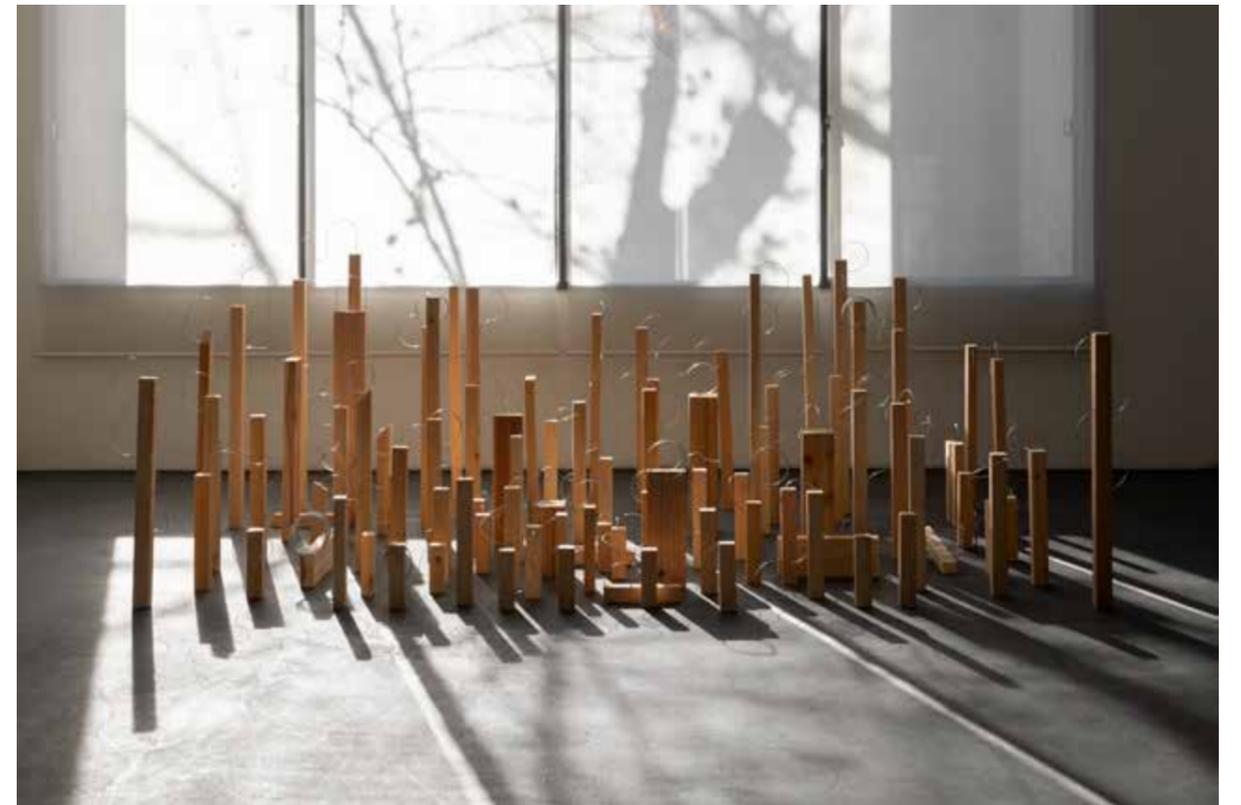
UTSUNOMIYA Asaka

空間演出デザイン学科研究室

lost

インスタレーション、木、針金
サイズ可変

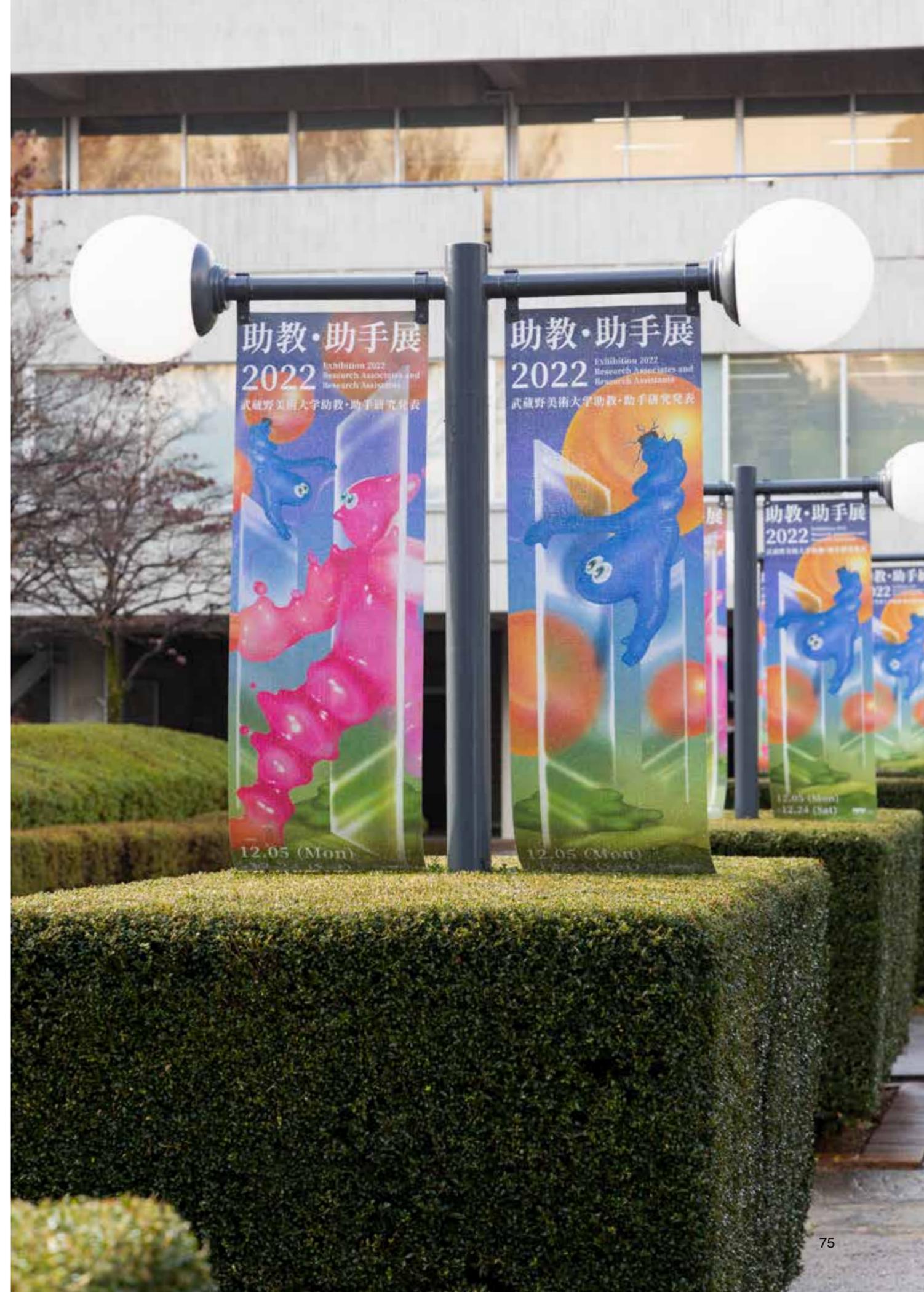
わたしたちはいつまで自己をどこかへ置いて無力感のまま誰かの営みを
続けていくのだろうか。



三ツ井 岳
MITSUI Gaku
建築学科研究室

ハレとケのあるところ
ミクストメディア
サイズ可変

気にも留めないこと
憶えておきたいこと
忘れていくこと



2022.10.24 MON - 11.20 SUN

武蔵野美術大学
現代工芸部
展示室1
30歳未満
無料

デザインの
図鑑

民具

くらしの
道具が
遠くから
送られて
来るの
想像

助教・助手展 2022
武蔵野美術大学助教・助手研究発表

2022.12.05 (Mon) - 12.24 (Sat)

AGAIN-ST
ROOTS TOOLS
ルーツ・ツール
彫刻の虚材と教材

AGAIN-ST TOOL EXHIBITION
2022.10.24 MON - 11.20 SUN
AND 12.5 MON - 12.24 SAT

武蔵野美術大学 美術館 図書館

武蔵野美術大学 美術館 図書館

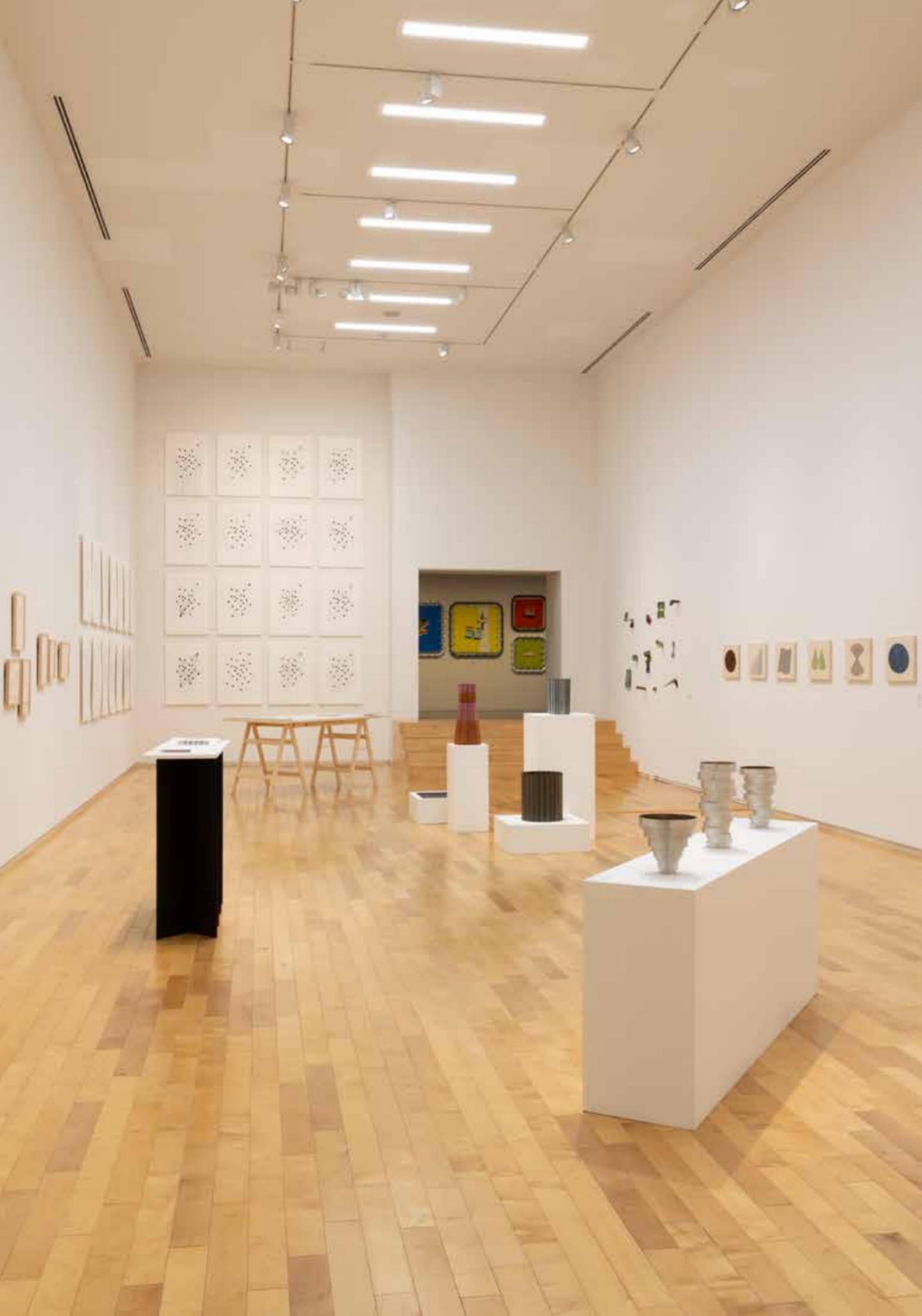




アンケートにご回答いただいた方へクリアファイルを配布、イベントへの参加や公式 Instagram をフォローしていただいた方にはステッカーを配布しました。







Event info 1

ライブペインティング



助教・助手展 2022 のオープニングイベントとして、6名の助教・助手によるライブペインティングが実施されました。各出演者が「助教 & 助手展」の中から一文字を担当し、約 80 × 80 cm のキャンバスにそれぞれ異なる素材・技法を用いてドローイング。完成した作品は会期中、展示会場に公開されました。



日時：12月5日（月）18:00 - 19:00
会場：9号館 1F ゼロスペース

出演：
佐藤 花（空間演出デザイン学科研究室 助手）「助」
所 彰宏（油絵学科版画研究室 助教）「教」
秋葉麻由子（日本画学科研究室 助教）「&」
山田百香（芸術文化学科研究室 助手）「助」
若林穂乃香（映像学科研究室 助手）「手」
たかはしけいこ（視覚伝達デザイン学科研究室 助教）「展」
※制作文字順

司会：関根萌夏（空間演出デザイン学科研究室 助手）、寺元詩織（工芸工業デザイン学科研究室 助手）

映像アーカイブ



Event info 2

アーティストトーク & ギャラリーツアー



3回に分けて実施されたアーティストトーク & ギャラリーツアー。ファインからデザインまで幅広い出展者に参加いただき、作品が作られるまでのエピソードや、コンセプトなどさまざまなお話を聞くことができました。なお、当日の様子はインスタライブで生配信されました。

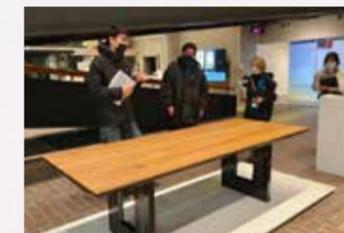
第1回



日時：12月8日（木）18:00 - 19:00
会場：展示室4・5、第10講義室、ホワイエ

出演：
大井直人（デザイン情報学科研究室 助教）
小野田 藍（芸術文化学科研究室 助手）
竹下早紀（工芸工業デザイン学科研究室 助手）

第2回



日時：12月16日（金）18:00 - 19:00
会場：展示室2、美術館ホール

出演：
齊藤啓輔（建築学科研究室 助手）
旗智柚奈（工芸工業デザイン学科研究室 助手）
佐藤 佑（工芸工業デザイン学科研究室 助手）
進行：河城ふみ（映像学科研究室 助手）

第3回



日時：12月20日（火）18:00 - 19:00
会場：アトリウム1・2

出演：
風間南楓（空間演出デザイン学科 助手）
夏目菜々子（工芸工業デザイン学科研究室 助手）
宮城島万利子（共通彫塑研究室 助教）



今回の展示のキーワードである「トランス (trans-)」を「超える」「向こう側へ行く」という意味で解釈し制作致しました。

最初に主役となるモチーフを決めて、そこから主役につながるストーリーや設定を加えていきます。

今回はまず「超える」「向こう側へ行く」という言葉から、「超えるべき存在」- ガラスの壁 - と「超える者」- ピンクの生物 - を連想し、この2つを主役に決めました。

上に浮かんでいる球は、コロナ禍で初めて気付いたことや、発見したことなどを「アイテムボックス」として捉え、表現しています。

球から出ている青色の子はコロナ禍だったからこそ巡り巡って出会った人や物という存在です。

壁は、状況は急に変化するわけではなく、目には見えないけど、じわじわ変わっていているというのを表現したくて透明のガラスにしました。(nico ito)

助教・助手展 2022 武蔵野美術大学 助教・助手研究発表
Exhibition 2022 Research Associates and Research Assistants

展覧会 会期：2022年12月5日(月) - 12月24日(土)
会場：武蔵野美術大学 美術館展示室2・4・5、アトリウム1・2、
第10講義室、美術館ホール、ほか
主催：武蔵野美術大学 美術館・図書館
企画：助教・助手展 2022 運営委員会

[代表] 寺元詩織
[副代表] 林 深音
[会場構成] 佐藤 花、寺元詩織、根本佳奈子、林 深音、
矢萩理久
[広報] 大井直人、白鳥佐和
[イベント] 風間南楓、河城ふみ、関根萌夏、難波梨乃
[図録] 多比良歩南、若林穂乃香

アートディレクション：nico ito
進行：竹島 薫、田村 仁 (武蔵野美術大学 美術館・図書館)

関連企画 「オープニングイベント」
企画・制作：風間南楓、河城ふみ、関根萌夏、難波梨乃
撮影・映像制作：大田 晃

「アーティストトーク&ツアー」
企画・制作：風間南楓、河城ふみ、関根萌夏、難波梨乃

図録 編集：多比良歩南、若林穂乃香
エディトリアルデザイン：多比良歩南、若林穂乃香
撮影：いしかわみちこ (p84、85をのぞく)
発行：助教・助手展 2022 運営委員会

発行日：2023年4月30日
本図録の一部もしくはすべてを模写複製することを禁じます。



助教・助手展

2022 Exhibition 2022
Research Associates and
Research Assistants

武蔵野美術大学助教助手研究発表